



中高生とともに差別と闘う 『誰もが持っているプレゼント』

吉成タダシ

若いころ、自分の奥底にある、誰にも語つたことのない思いをカミングアウトする中学生を初めて目の当たりにしたとき、「この子の思いに応えたい。この子の思いに応えられる言葉とは……」と、それまでの自分の人生を真剣に振り返ったことがあります。そういう思考や行為はすごく大切な過程だと今でも思っています。でも、自分のなかに同等の思いが見つけられなければ、いったい何を返せばいいのか。何を語ればいいのか……。

「いい加減な言葉や薄っぺらい言葉を返すことは、一萬円に釣り合わず、逆に相手に失礼になるんじやないか。だから中途半端になるぐらいいいのか……。

一万円のプレゼントをもらつたら
一万円のプレゼントを返したくなる
のが人情というもののかもしれない
ん。でも、自分が一万円を持ってい
なければ…。

意外と仲良くなつたりとかして、結構自分の悪いところも指摘してくれるっていうのは、本当に人生って分からないものだなと思いました。」

です。ほんと人生って分からぬもので。だから、『こういうふうに思つて』って、上辺だけのように聞こえても、意外とその子はその子なりに真剣に考えたのかも知れな

「一万円の『プロセン』」
「その泣いてしまったときには、マ
キちゃんとかが声をかけてくれて。
口論になつた子ども、今は仲いいん

なら黙ってた方がいいんじゃないかな? それでも、「言葉を返す」ことを子どもたちに迫つてきました。で

私が歩んできた半生への後悔。それらが、飲んだお酒の代わりに涙となつてこぼれ落ちていました。おまけに、「先生も苦労してないか」と私を気遣う言葉もいたございたり。

なつたのですが、転勤した年の初夏、
学校に電話がかかってきました。前
任校の先生からでした。
「先生、ユウジのお父さん、亡く
なりました」

和を笑ひ、詠歌をいががいが

卷之二

卷之三

虎穴に入らずんば虎胆を得ず
教員になりたてのころ。ある日、私の指導に立腹した地区のお父さんが、私と担任と教頭を自宅に呼び出したことがあります。会議で遅れて自宅に行くと、顔を真っ赤にしたお父さんの前で教頭と担任は正座をしてうなだれていきました。説明をし、謝罪もするのですが、いつこうにお父さんは納得してくれません。ひとしきり過ごしたあとで、「時間も時間なので…」と、教頭が言いかげたとき、「もう少し残つてもいいですか」と願い出ました。お父さん同様に私も納得していなかつたからでした。

しばらくして、「カラオケに行くぞ」と、近くのカラオケ屋に連れ出されたのですが、家に帰つてみると、どこからか、ちゃんと夕食用にお鍋が用意されていて、「先生、晩飯食べな」と一言。酒を飲んで、鍋をついて。お父さん、ごろんと横になつて眠つてしましました。ユウジに、「先生、もう帰るから、お父さんによろしく。」ちそうさま。ありがとうございましたと告げて、とぼとぼと学校まで歩いて帰りました。

「先生と話すにもお酒の力を借りないと話せなかつたんじやないか。お父さん、本当は話を聞いてほしかつたんじゃないか。誰かと一緒に晩飯を食べたかったんじやないか。

「えつ」ショックでした。胸をドンッ
と叩かれたようでした。時が止まつた
ように、受話器を持ったまま立ち
尽くしてしまいました。

この後も、ユウジのお父さんのよ
うに若くして命を落とした父母を何
人も見てきました。それはどれもま
るで、死に急ぐかのような生き様で
した。その度に思いました。「人の一
生って何だろう。この人の人生って
何だったんだろう。何のために生ま
れ、生きてきたんだろう。生まれて
きた意味ってあつたんだろうか」そ
んな反問が私の中ですつと繰り返さ
れるのですが、その度に、「生まれ
てこなくていい命なんてどこにもな
い」と強く思うのです。

お父さんと差しで向かい合う」となりました。小さい部屋に一人だけになるとすぐ、「ユウジ、コップ持つてこい」と、隣の部屋にいた我が子に向かって指示をします。お父さんは私にコップを持たせ、一升瓶でお酒をつぎはじめました。

しばらくして、「カラオケに行くぞ」と、近くのカラオケ屋に連れ出されたのですが、家に帰つてみるとどこからか、ちゃんと夕食用にお鍋が用意されていて、「先生、晩飯食べな」と一言。酒を飲んで、鍋をついて。お父さん、ごろんと横になつて眠つてしましました。ユウジに「先生、もう帰るから、お父さんによろしく。」ちやうさま。ありがとうございました」と告げて、とぼとぼと学校まで歩いて帰りました。

「先生」と話すにもお酒の力を借りないと話せなかつたんじゃないか。お父さん、本当は話を聞いてほしかつたんじゃないか。誰かと一緒に晩飯を食べたかつたんじゃないか。
……」

道すがらいろんなことを思い巡らせました。驚いたのは家に帰り着いたときでした。ユウジから電話がかっていたのです。「なぜ?」折り返し電話をすると、受話器ごしにユウジがぼそりと、「先生が無事に帰

「えつ」ショックでした。胸をドンッと叩かれたようでした。時が止まつたように、受話器を持ったまま立ち尽くしてしまいました。

この後も、ユウジのお父さんのように若くして命を落とした父母を何人も見てきました。それはどれもまるで、死に急ぐかのような生き様でした。その度に思いました。「人の一生って何だろう。この人の人生って何だったんだろう。何のために生まれ、生きてきたんだろう。生まれてきた意味ってあつたんだろうか」そんな反問が私の中ですつと繰り返されるのですが、その度に、「生まれてこなくていい命なんてどこにもない」と強く思うのです。

いただいた一万円に相当するブレゼントが自分のなかになければ返しようがありません。劇的な人生を歩んでいれば、それをお返しとして語り返すのかもしれません、たとえ一万円がなくとも、「あなたのことを大切に思つてるし、つながり続け

お父さんと差しで向かい合う」となりました。小さい部屋に「一人だけになるとすぐ、「ユウジ、コップ持つてこい」と、隣の部屋にいた我が家子に向かって指示をします。お父さんは私にコップを持たせ、一升瓶でお酒をつぎはじめました。

しばらくして、「カラオケに行くぞ」と、近くのカラオケ屋に連れ出されたのですが、家に帰つくるとどこからか、ちゃんと夕食用にお鍋が用意されていて、「先生、晩飯食べな」と一言。酒を飲んで、鍋をついて。お父さん、ごろんと横になつて眠つてしましました。ユウジに「先生、もう帰るから、お父さんによろしく。」ちそうさま。ありがとうございましたと告げて、とぼとぼと学校まで歩いて帰りました。

「先生」と話すにもお酒の力を借りないと言せなかつたんじやないか。お父さん、本当は話を聞いてほしかつたんじやないか。誰かと一緒に晩飯を食べたかつたんじやないか。
……

道すがらいろいろなことを思い巡らせました。驚いたのは家に帰り着いたときでした。ユウジから電話がかかつっていたのです。「なぜ?」折り返し電話をすると、受話器こしにユウジがぼそりと、「先生が無事に帰れてるか、父さんが電話しろって」と。お父さん、本当は寝ていなかつたのです。寝たふりをして私を解放してくれたのでした。

「えつ」ショックでした。胸をドンッと叩かれたようでした。時が止まつたように、受話器を持ったまま立ち尽くしてしまいました。

この後も、ユウジのお父さんのように若くして命を落とした父母を何人も見できました。それはどれもまるで、死に急ぐかのような生き様でした。その度に思いました。「人の一生って何だろう。この人の人生って何だったんだろう。何のために生まれ、生きてきたんだろう。生まれてきた意味ってあつたんだろうか」そんな反問が私の中でずっと繰り返されるのですが、その度に、「生まれてこなくていい命なんてどこにもない」と強く思うのです。

いただいた一円に相当するプレゼントが自分のなかになければ返しようがありません。劇的な人生を歩んでいれば、それをお返しとして語り返すのかもしれません、たとえ一円がなくとも、「あなたのことを大切に思つてるし、つながり続けたい」と強く願い、真正面から体当たりする気持ちさえあれば、それは一万円の価値として相手に伝わり、道は開けていくのではないかと思いま

れませんでした。代わりに、別れた連れ合いさんへの思い。残った三人の子どもに対する不安。これまで自

しばらくして、「カラオケに行くぞ」と、近くのカラオケ屋に連れ出されたのですが、家に帰つくるとどこからか、ちゃんと夕食用にお鍋が用意されていて、「先生、晩飯食べな」と一言。酒を飲んで、鍋をついて。お父さん、ごろんと横になつて眠つてしましました。ユウジに「先生、もう帰るから、お父さんによろしく。ごちそうさま。ありがとうございます」と告げて、とぼとぼと学校まで歩いて帰りました。

「先生」と話すにもお酒の力を借りないと話せなかつたんじやないか。お父さん、本当は話を聞いてほしかつたんじやないか。誰かと一緒に晩飯を食べたかったんじやないか。
……

道すがらいろいろなことを思い巡らせました。驚いたのは家に帰り着いたときでした。ユウジから電話がかつっていたのです。「なぜ?」折り返し電話をすると、受話器越しにユウジがぼそりと、「先生が無事に帰れてるか、父さんが電話しろって」と。お父さん、本当は寝ていなかつたのです。寝たふりをして私を解放してくれたのでした。

「えつ」ショックでした。胸をドンッと叩かれたようでした。時が止まつたように、受話器を持ったまま立ち尽くしてしまいました。

この後も、ユウジのお父さんのように若くして命を落とした父母を何人も見てきました。それはどれもまるで、死に急ぐかのような生き様でした。その度に思いました。「人の一生って何だろう。この人の人生って何だったんだろう。何のために生まれ、生きてきたんだろう。生まれてきた意味ってあつたんだろうか」そんな反問が私の中ですっと繰り返されるのですが、その度に、「生まれてこなくていい命なんてどこにもない」と強く思うのです。

いただいた一万円に相当するプレゼントが自分のなかになければ返しようがありません。劇的な人生を歩んでいれば、それをお返しとして語り返すのかもしれないが、たとえたりする気持ちさえあれば、それは一萬円がなくとも、「あなたのことを大切に思つてるし、つながり続けたい」と強く願い、真正面から体当たります。マミとその仲間たちの関係が、まさにそつだつたのだと思います。

（次回「自分たちで作りあげたから】